

# 現職教員と教員志望学生の児童・生徒観 および指導行動に関する研究 (11) —改良版学習指導行動尺度作成の試み—

○林 龍平 (関西福祉科学大学)  
藤田 正 (奈良教育大学)

崎濱秀行 (阪南大学)

キーワード：現職教員，教員志望学生，学習指導行動

## 問題と目的

本研究の目的は，崎濱・林・藤田 (2016) が児童・生徒観尺度と同時に開発した学習指導行動尺度の改良版尺度を作成することであった。崎濱・林・藤田 (2016) では，現職教員および大学生が重視する学習指導行動の構造を検討するための 1 因子構造から成る「学習指導行動尺度」が作成されたが，そこで得られた結果を見ると，複数の下位項目において必ずしも一貫して児童・生徒中心のか教師中心のかという考え方がされているわけではなかった。

実際，崎濱らの項目 7「公式・法則の成り立ちは，児童・生徒自身が考えることを通して理解させる一公式・法則の成り立ちは，教師が説明することで児童・生徒に理解させる」(4 件法) における評定平均値を見ると，値が 2.13 ( $SD=0.86$ ) であり，児童・生徒中心のとも教師中心のとも判断できない結果であった。このことは，個々人の中で，児童・生徒中心の見方と教師中心の見方が併存している可能性を示唆していると言える。

そこで，先の児童・生徒観尺度と同様，学習指導行動尺度についても児童・生徒中心 vs. 教師中心という一対構造で問うた項目をそれぞれ単一項目とし各々の項目をどの程度重視しているかを尋ねる方が回答者の児童・生徒観をよりの確に捉えることができると考えた。

そこで本研究では，崎濱ら (2016) で作成された学習指導行動尺度の各項目を対比的な対形式の質問の仕方ではなく単一項目として問う形に変更し，学習指導行動についての考え方をより詳細に捉えることにした。

## 方 法

**調査参加者** 近畿地方の大学生 118 名 (男性 43 名，女性 75 名，平均年齢 19.7 歳)。

**材 料** 改良版学習指導行動尺度を用いた。いずれも，崎濱ら (2016) を単一項目化したものであり，30 項目で構成される。回答者に対しては，各々の項目について，1 (まったくあてはまらない) ～ 4 (非常によくあてはまる) の 4 件法で回答するよう求めた。

**手続き** 本研究は web を通して行われた。調査実施にあたっては，教育心理学に関する授業にて，調査の目的および調査への回答を呼びかける紙面を配布した。その上で，回答に同意した者だけが回答するよう求めた。

## 結果と考察

SPSS Ver. 25.0 により，得られたデータに関する因子分析 (主因子法 Promax 回転) を行った。固有値 1 以上，因子負荷量 0.35 以上，固有値の減衰率を考慮し，2 因子を抽出した。

第 1 因子 ( $\alpha=.88$ ) は「2. 授業では，生徒の発言の機会をできるだけ多くする。」「11. 授業で出会った困難な問題については，時間をかけて生徒自身にじっくり考えさせることを重視する。」などの項目が高い負荷量を示した。全体として，児童・生徒を中心に据えた学習指導行動に関する 17 項目で構成されていたことから，第 1 因子を「児童・生徒中心の学習指導行動」因子と命名した。

第 2 因子 ( $\alpha=.80$ ) は「9. 授業では，正しい考え方や解き方を教えることを中心にした指導を行う。」「5. 授業では，教師が生徒の誤りを指摘する指導を行う。」などの 11 項目が高い負荷量を示した。全体として，教師が中心となって学習指導を行うに関する項目で構成されていたことから，第 2 因子を「教師中心の学習指導行動」因子と命名した。

崎濱ら (2016) では「学習指導行動」の一面のみが見出されたが，本研究では「児童・生徒中心の」「教師中心の」の 2 側面が示された。このことから，学習指導行動尺度に関しては，本研究で用いた尺度 (改良版) の方が，回答者の重視する学習指導行動の中身や構造をより詳細に捉えることができると考えられる。

ただし，本研究における回答者はすべて大学生であった。そのため，今後は現職教員のデータも取得し，現職教員一教員志望学生間で学習指導行動各側面の重視度合いの様相が異なるのかどうかを検討する必要がある。また，改良版児童・生徒観尺度の各下位尺度との関連については検討がなされていないことから，今後，下位尺度間の関連についても検討する必要がある。